

## 「疑問」

### —なぜ強い者が弱い者を淘汰するのか—

“Question”:

### Why Do the Strong Dominate Over the Weak?

漆田 典子

URUSHIDA, Noriko

#### はじめに

いつの時代も、世の中には多くの疑問が存在する。

現代という時代を 70 年以上生きてきた私の最大の疑問は、「なぜ強い者が弱い者を淘汰するのか」という人間現象に対する疑問である。

この疑問は、侵略に侵略を繰り返してきた人類史の延長上にある今日の軍事的力主義に対する疑問であり、更には競争原理で成り立つ現代の経済的力主義に対する疑問でもある。しかし、この疑問は未だ解明されていない。我々は、これから一体どのように、この疑問を解き明かしていくのだろうか。

そこで注目したのが、時を遡って、ニュートンの「なぜリンゴが木から落ちるのか」という自然現象に対する疑問が解明されて、そこから実際に自然界の抽象的な自然原理が導き出されている歴史的事実である。この歴史的事実から類推して、人間現象に対する「疑問」も解明できる筈であり、そこから人間界の抽象的な人間原理も導き出せる筈だと予測したのである。

このエッセイは、この予測の下に、既に解明されているニュートンの自然現象に対する「疑問」と未だ解明できない先の人間現象に対する「疑問」とを対峙させて、人間現象に対する疑問が未だ解明できない原因とその社会的背景を具体的に探ろうとする

ものである。

#### 1 求められる発想の転換

私は、子供の頃に、有名なニュートンの逸話に対して「リンゴが上から下へ落ちるのは当然ではないか。どうして疑問に感じるのだろうか」と不思議に思った記憶がある。しかし、その記憶とは裏腹に、ニュートンの疑問から人間の目に見えない自然現象の背後にある自然界の抽象世界が解明され、実際にそこから力学的法則などが導き出されている。それらは既に学問として確立されており、今日では、自然現象に疑問を感じない人々が「自然現象の背後にある抽象世界などは分からない」と主張できない、人間社会全体での共通の認識を持てる時代になっている。もしニュートンのような自然現象に疑問を持つ人々が、人間の目に見えない自然界の抽象世界を科学的に解明していなければ、自然現象に疑問を感じない人々は、現代でも「自然現象の背後にある抽象世界などは分からない」とする、現代流に言えば「自然不可知論」を主張していたに違いない。この私自身の自然界に対する記憶や認識から推し量って、「人間」が未だ解明されていない世の中には、「強い者が弱い者を淘汰するのは当然ではないか」と考える人々が大量存在していて、もしかしたら、それ

らの人々が人間現象の背後にある目に見えない抽象世界などは分からないとして「人間不可知論」を主張しているのではないかと、そして、それらの主張を間違いだとする共通の認識も我々が未だ持てない時代なのではないかと、そのように直観的に感じたのである。

次に述べる自然界への疑問と人間界への疑問を対峙させるといふ奇異な発想は、この直観を理性的に具体化させたものである。

## 2 人間の目に見えない二つの抽象世界

### (1) 自然現象（なぜリンゴが木から落ちるのか）の背後にある抽象世界

一般論として、リンゴが下から上へ向かうのではなく、上から下へ向かうのは当然の自然現象である。それでは、この当然の現象に、なぜニュートンのように疑問を感じる人々が存在するのか。それは自然現象の背後にある抽象的な世界を無媒介的な直観で把握できる感性を先天的に備えている人々が存在しているからだと思う。この人間の目に見えない自然界の抽象世界を把握する直観的能力を「自然感性」とする。そして、この感性の実体を「自然精神」とする。この「自然感性」と「自然精神」によって自然現象の背後にある人間の目に見えない抽象的な世界は解明されていく。そこから導き出された自然界の根底を貫く力学的法則などの自然原理は、実際に、巨大な飛行機の構造設計や超高層ビルの構造設計などに現在も実践的に応用されている。また多くの自然現象に対する疑問が解明されている現代は、日食などの自然現象を「神の怒り」と考えるような迷信に誰も支配されなくなっている。

### (2) 人間現象（なぜ強い者が弱い者を淘汰するのか）の背後にある抽象世界

一般論として、弱い者が強い者を淘汰するのではなく、強い者が弱い者を淘汰するのは当然の人間現象である。それでは、なぜこの当然の人間現象に疑問を感じる人々が存在するのか。これも人間現象の背後にある抽象的な世界を無媒介的な直観で把握できる感性を先天的に備えている人々が存在しているからだと思う。この人間の目に見えない人間界の抽象世界を把握する直観的能力を「人間感性」とする。そして、この感性の実体を「人間精神」とする。しかし、この「人間感性」と「人間精神」によって解明される筈の人間現象の背後にある抽象世界は未だ解明されていない。またそこから導き出される筈の人間界の根底を貫く人間原理も未だ導き出されていない。その結果、我々人間は、現代に至っても、強い者に不当に淘汰されるという人間に対する疑心暗鬼の妄想的な恐怖意識から抜け出すことができないのである。そして、世界中の国々が軍事的侵略の脅威に怯えながら、貴重な命を戦争（聖戦）に捧げる蛮行に未だ支配されざるを得ないのだと思う。

以上のように自然界への疑問と人間界への疑問を対峙させることで、世の中には、同じ感性という言葉を使用しているとしても、自然に対する「自然感性」と人間に対する「人間感性」との全く異質の二つの感性が存在していることや、また同じ精神という言葉を使用しているとしても、自然現象の背後にある抽象世界を直観で捉える「自然精神」と人間現象の背後にある抽象世界を直観で捉える「人間精神」との全く異質の二つの精神が存在していることを辛うじて理解できるようになると思うのである。

この異質の感性と異質の精神を有する二つの実在とを対峙させて「人間」を理解できるようにならな

い限り、我々は「人間現象の背後にある抽象世界は分からない」とする人々が唱える「人間不可知論」の誤りを永久に糺すことができないと思う。

### 3 西田幾多郎の根源的な人間観を問う

それでは、ニュートンのような自然現象に疑問を持つ人々が人間の目に見えない自然現象の背後にある抽象世界を解明して、そこから実践的に社会に役立つ自然界の原理原則を導き出しているのに、人間の動きに疑問を持つ人々が、なぜ現代に至っても人間の目に見えない人間現象の背後にある抽象世界を解明して、そこから実践的に社会に役立つ人間界の原理原則を導き出すことができないのだろうか。その最大の理由は、我々が自分という「人間」を客観的に捉えることができないことにあると思う。即ち、精神葛藤を繰り返して自己意識の根底まで掘り下げて導き出した人間観も、それぞれの人間が、それぞれ自分の自然精神（唯物論的精神）、あるいは自分の人間精神（唯心論的精神や観念論的精神）を基盤に導き出した自己中心的な人間観であり、それらはそれぞれの人間にとっては正しい人間観であっても、全人類共通の人間観には至らないということである。歴史に残る偉大な哲学者の人間観も例外ではない。

次に、西田幾多郎著『善の研究』（岩波文庫 1980年第49刷）の中の一節を取り上げて、この著名な哲学者の人間観について具体的に考えてみたい。

我々と全く意識の根源を異にせるものがあつたならばとにかく、凡ての人間に共通なる理性を具した人間であるならば、必ず同一に考え、同一に求めなければならぬと思う。勿論人類最大の要求が場合に由っては単に可能性に止まって、現実となって動かぬこともあるであろう。しかしかかる

場合でも要求がないのではない。蔽われているのである。自己が真の自己を知らないのである。

（同書：205頁）

この西田幾多郎の視点は、現在の我々人間に共通する視点だと思ふ。それでは、もし西田幾多郎が主張するように、我々が同一に考え、同一に求める存在者であるならば、これまでの偉大な哲学者が導き出してきた根源的な人間観が、なぜ全人類共通の人間観に未だつながっていかないのだろうか。その原因こそ、「我々と全く意識の根源を異にせるものがあつたならばとにかく、凡ての人間に……」というアンダーラインで示した西田幾多郎の人間観を根本から覆す人間の存在、即ち、「我々と全く意識の根源を異にせるもの」が実際に存在しているという証ではないだろうか。その結果、一方の自然精神で自然界の抽象的な世界を解明していく人々の求める人間観と、もう一方の人間精神で人間界の抽象的な世界を解明していく人々の求める人間観とが必然的に異なってしまうばかりか、根源的に対立してしまうのではないだろうか。実際に、哲学史の中には、この仮説を実証するような個々の人間によって根源的に異なる人間観や根源的に対立してしまう人間観が数多く存在する。例えば、精神に対する物質の根源性を主張する立場の唯物論的な人間観と、物質に対する精神の根源性を主張する立場の唯心論的（観念論的）な人間観の対立などは最も顕著な例だと思ふ。私はこれらの対立を意識の根源を異にする二種の実在からの対立だと理解している。しかし西田幾多郎は、この両者の対立を次のように解釈している。

精神現象、物体现象の区別というものも決して二種の実在があるのではない。精神現象というのは

統一的方面即ち主観の方から見たので、物体现象とは統一せらるる者即ち客観の方から見たのである。ただ同一実在を相反する両方面より見たのにすぎない。それで統一の方より見れば凡てが主観に属して精神現象となり、統一を除いて考えれば凡てが客観的物体现象となる（唯心論、唯物論の対立はかくの如き両方面の一を固執せるより起こるのである）。（同書：99頁）

この解釈は、精神の根源性、或いは物質の根源性のどちらかを本性的に真実と考えている者にとって、到底納得できるものではないだろう。先に西田幾多郎が示した精神現象と物体现象の区別は、本文で対峙させてきた人間現象への根源的な疑問を持つ実在と自然現象への根源的な疑問を持つ実在との二種の異なる実在からの区別であり、唯心論と唯物論の対立はその異なる実在からの本性的な対立になっていると私は理解する。しかし、人間界への疑問が解明されていない現在、人間を自分と同一実在と見なす人間観（これを天動説的人間観とする）を基盤としたこの類の解釈に反論する術は全くない。

最後に、これに反論する術として、人間を自分と同一実在と見なす人間観から、二種の実在（自然現象の背後にある抽象世界を捉える精神を持つ実在と人間現象の背後にある抽象世界を捉える精神を持つ実在）を対峙させて理解する人間観（これを地動説的人間観とする）への発想の転換を是非提案したい。因みに、歴史的に有名なコペルニクス的な発想の転換は、自然界に対する発想の転換であり、この人間界に対する発想の転換は未だ残されたままなのである。その意味で、人間現象への疑問が未だ何一つ我々人間の共通認識として解明されていない現代という時代は、自然現象への疑問が解明されていない

中で、天動説的自然観が強力に支配していた中世の暗黒時代に匹敵する第二の暗黒時代といえるのではないだろうか。

人類の危機は、この暗黒時代に生きる我々人間の動きの必然的な帰結だと思う。

## 参考文献

- 漆田典子、川村京子（1990）『人間精神の科学的解明』岩波出版サービスセンター制作  
 漆田典子、川村京子（1995）『人間の研究』岩波出版サービスセンター制作  
 河辺六男責任編集（1979）『世界の名著 31 ニュートン』中央公論社  
 島尾永康（1996）『ニュートン』岩波新書  
 西田幾多郎（1980）『善の研究』岩波文庫

漆田 典子（一般会員 人間の研究）